八神コウの弟

こうちゃん03

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八神コウには、弟がいる。その名は八神カノン。アメリカの大学を１５歳の若さで卒業し、ゲーム会社のイーグルジャンプに就職。

そんなほのぼのな毎日。

注意

作者がかってに妄想した話です。

基本アニメを基準に書きます。

作者はアメリカ人であり、日本語が得意ではないので、間違いなどがあればＤＭ、感想などでお願いします。

ヒロインは未定です。（そもそも、可能なのかな？）
不定期更新です（受験生なので）
１２／１３／２０１７　設定が労働権基本法を違憲してたので、１４歳から１５歳へ設定変更。

目次

第一話 1
第二話 6
第三話 13
第四話 19
第五話 28

第一話

春です。僕は八神カノン。15歳！アメリカの大学を飛び級で卒業し、社会人になろうとしてます。就職先は、お姉ちゃんと一緒の『イーグルジャンプ』です。

「ええと、服装は自由だからこれはオッケー。髪は大丈夫。よし！」

最後に身だしなみをチェックした僕はドアを開け、家を出た。電車に乗り、歩いて約15分。僕は『イーグルジャンプ』に着いた。なんだけど、

紫色のツインテールが会社前で立っていた。ん？何か言ってるぞ。

「涼風青葉です。よろしくお願いします。涼風青葉です。よろしくお願いします。」

「あの大丈夫ですか？」

僕は涼風さんに声を掛けてみた。彼女は僕より身長が高く、服装が社会人っぽい。

「え、あ、はい。大丈、」

「コラ！」

「「うわ！」」

声の方向を見ると、紫色をした瞳と肩まであるショートヘアな女性が立っていた。見るだけで分かる。大人だ。

「なーんて。ここは会社だから、子供はダメよ」
「あ、ハイ」
そう言ってしまい、女性は会社へ行こうとした。あ、
「違います！」
そう叫びながら、僕は彼女の腕を掴んだ。
「新入社員の八神カノンです。でこっちが」
「今日からイーグルジャンプで働かせて頂く、涼風青葉です。よろしくお願いします」
そう言って、涼風と僕は礼をした。
「あら、新入社員さんだったのね。ごめんなさいね」
「いいえ、僕こそ無礼な事をしてしまい、本当にすみませんでした。入社するって聞いていますか？」
彼女は少し考え、
「あ、いっしょのチームだわ。私はＡＤの遠山りんです。よろしくね」
と自己紹介をした。
その後、涼風がＡＤをＡｓｓｉｓｔａｎｔ　Ｄｉｒｅｃｔｏｒと間違えて土下座をしたのは黙っておこう。（嘘
会社の中はとてつもなく綺麗だった。床はカーペットであり、机が大きかった。予想

以
上に。
「ここがあなたの席よ。カノンさんは奥のほうね」
涼風さんは、わー、と声を出しながら関心していた。
「あ、そうだ。何か飲む？」
「あ、それじゃあオレンジ、、コーヒー。ブラックで！」
青葉はオレンジブラックコーヒーか。後でｇｇろう。
「カノンさんは？」
「んー。アップルジュースってありますか？」
僕はまだ１５歳だ。カフェインは身長の伸びを止めると言うからな。
「ええ。あるわよ」
「じゃあ、お願いします。」
遠山さんが飲み物を取りに行った後、僕は少し落ち着いた。あ、そういえば、
「まだ自己紹介がまだだったな。」
「そうですね、」
涼風の様子が変だけど、まあ気のせいでしょう。
「とりあえず、始めまして。八神カノンです。大学を卒業して来ました。よろしくお願

いします。」

「涼風青葉です。高卒です。よろしくお願いします。」

自己紹介を終え、空気が少し重くなった。

そんな中、

「つかれたー」

あれ?また気のせいかな?変な声を聞こえたような、、

後ろからの声のほうを見ると、なんと真っ白な足が墨からでていた。

「「うあぁぁぁ」」

あまりにも怖くて、思わず涼風さんを抱きしめてしまった。お化けは前から怖く、夜は大の苦手。

「涼風さん。アレって」

「お化け?」

少しずつ足のほうへ歩いていった。そして、そこで見たものは、

「おパンツー!!!?」

金髪のロングヘア美人が寝ていた。服装が長袖の黒いシャツが一枚と、水色のパンツ一枚。ズボンやスカートはＺＥＲＯ。

「んん・・・ん?」

女性は、青葉の奇声により起きてしまったのか、ゆっくりと机を持ち、立った。
「中学生？なんで子供がいるの？」
女性はこっちのほうを見た。僕とまったく同じ青い目がナイフみたいに刺さった。
いや、まて。黒い長袖一枚とパンツで寝る、金髪の青い目。これって、間違いなく。
「お姉ちゃん？」

第二話

「お姉ちゃん?」
その金髪ロングにパンツ一枚で寝る癖。間違いなく僕のお姉ちゃんの八神コウだった。
「カノン、、なのか?」
まるで世界の偉大なる秘密を見つけたような声を漏らしながら、お姉ちゃんは僕を見つめた。
「あら、起きたの?」
遠山さんが三つのコップを持ちながら、歩いてきた。
「りん、この子だれ?何でカノンがいるの?!」
お姉ちゃん状況をあんまりつかめず、パニック状態になっていた。
「今日から入社した涼風青葉さんよ。カノンさんも今日から入社したのよ。少し驚かせたくて、秘密にしてたの」
「え!?カノン、入社したの?」
まだ朝だというのに、お姉ちゃんはいきなり肩を強く揺さぶった。

「う、うん。僕もお姉ちゃんを驚かせたくて言ってなかった。ごめんね」
「あ、これ私のだけど、飲む？」
「うん。サンキュー」
「はい、これカノンさんの」
「あ、ありがとうございます。あと、『さん』はやめてください。なんとなく嫌です。」
「わかったわ」
　少しは落ち着いたお姉ちゃんは、涼風のほうを眺めた。
「へー。でもう一人はどこn、ゲホッゲホッ」
　お姉ちゃんがコップを口にした瞬間、いきなり咳きをした。
「これ、砂糖入ってないじゃん」
「あ、逆だったわ。ごめんなさい」
　なんだ、砂糖か。風邪をひいたと思って心配した。
「交換。ませてるなー、ブラック飲むの？」
「大人ですから、これくらい余裕です」
　そう言いぶって、コーヒーを一口飲んだ涼風は名前みたいに青くなり、
「ゲホッゲホッゲホッゲホ」
「飲めないのかよ！」

さすがお姉ちゃん。素晴らしい突っ込み。お姉ちゃんは自分のデスクの近くの椅子に座った。
「で、歳はいくつなの?」
「18です」
「へー、高卒できたの。珍しい」
そう、高卒でゲーム会社に来るのは本当に珍しいものだった。普通は僕みたいに、大学を卒業してから就職する。そのほうが収入的にも、仕事的にも良いから。
「でも、高校生にも見えないな。ハッハ」
「お姉ちゃん。それって、」
「あ、ゴメン」
涼風は僕より身長高いから、なんともいえないし、実際ぼくは中学校に通ってるはずだから。
「あなたこそ、おいくつなんですか?」
涼風は大胆に聞いたものの、、
「いくつに見える?」
やっぱりこう返された。女性は年齢のことには注意してるから、下手なことを言ったらダメ。そのプレッシャーに固まる涼風。でも、視線をそらした先に、

「あ、あれは、フェアリーズストーリーのポスター」
「おー知ってるんだ。私が始めて携わったゲームなんだ」
　目がいい。お姉ちゃんが始めて携わったゲーム「フェアリーズストーリー」、英語で〝Ｆａｉｒｉｅｓ　Ｓｔｏｒｙ〟アメリカでも売り上げが殺到した伝説のゲーム。懐かしいな、始まりの村で敵モブを倒しながら、レベルをカンストまであげる日々。まさに、芸術。（個人的な意見です）
「え!?小学校のときにすごいハマったんですよ。それでここの会社をしって、、」
　涼風の声が少しずつ小さくなった。ん?なにかに気付いたのかな?
「ま、ま、ま、まさか、、、　みそ」
「そんなにいってないわい!２５だよ。私も高卒で入ったの」
　と言い、ムっとなった。正直、かわいかった。
「あ、ごめんなさい」
「ふふ、いいのよ気にしなくて。ち・な・み・に、私はいくつに見えるかな?」
「２３?」
　涼風がアバウトで答えた。僕もそんな感じと思った。身長は僕より高いし、大人のオーラーは出てたけど、なんか若いのが、、
「同い年だよ!」

「良い子ね」
お姉ちゃんは少し怒った声で突っ込んだ。年齢、怖い。今度はお姉ちゃんがぼくに振ってきた。
「そういえばカノン、少し遅いけど大学卒業おめでとう。」
「うん！ありがとう！」
「確か、高校と中学校飛び級で行ったよね」
「「え、そうなの？」」
ん？遠山さんと涼風さんは知らないようだ。僕は日本の小学校に通っていたが、あまりにも低レベルだったから、お母さんに土下座してアメリカの中学へ通った。でも、言語バリアーも一ヶ月で破壊し、気付いたら大学に推薦で入っていた。
「まあ、色々あって、ハハハ」
「じゃあ、カノン君って何歳なの？」
涼風が必死そうにこっちをみた。紫色の目がまるで、肉食動物が草食動物を狙うように、じーっと。
「じゅ、１５歳です」
「「１５歳!?!!」」
＝＝＝＋＋＋＝＝＝

「でも感動です。子供のころに好きだったゲームを作っていた人たちが、目の前にいるなんて。私、特にキャラクターのデザインが好きで」

青葉が熱く語っていると、お姉ちゃんが最後のほうで反応した。

「あら、ならここにいる八神コウがフェアリーズストーリーのキャラデザだったのよ」

お姉ちゃんが誇らしく、エッヘン、と腕を組んだ。

「八神先生だったんですか!?」

「急に態度変わったな?」

「って、今気付く?」

俺も突っ込んだ。さすがに分かるだろう。苗字が「八神」だし、「お姉ちゃん」って呼んでるし。

「え、じゃあカノン君って八神先生の弟となるのですか?」

「ん、まあそうなるね」

「ちなみに今日からコウちゃんが涼風さんとカノン君の上司だから、二人とも仲良くやってね」

「が、がんばりまt」

「あ、噛んだ」

見事に噛んだな。

「今のは、忘れてください！」

＝＝＝――――＝＝＝

その後、お姉ちゃんがまだ朝ごはん食べてないだろうから、近くのコンビニへ行って昼ごはんと朝ごはんを買いに行った。

「で、お姉ちゃんなに食べるの？僕、同じの買うから。」

「いや、別に同じのじゃなくても良いんだよ」

「でも、僕はお姉ちゃんと一緒ｇ！」

「おい、バカ！」

お姉ちゃんが急に口をふさいで回りをみた。小さいコンビニだけど、人がいっぱいいた。ん？お姉ちゃん、顔が赤い。

「と、とりあえず、私はレ＊ド＊＊とおにぎりを買うから、同じので良い？」

「うん！あ、でもレ＊ド＊＊は飲めないから、代わりにカフェオレ買ってくれない？分けるから。」

「もう、しょうがないなー」

そう言って、お姉ちゃんが笑った。

第三話

ぱっぱと挨拶を終えた僕と涼風さんはすぐ仕事についた。僕のデスクはお姉ちゃんのすぐ隣。ディレクターさんによると、「うん、カノン君も八神君の隣で仕事した方が安心だろ？」との事です。まあ、たしかに安心しますがお姉ちゃんがゲームのことになるとすぐムキになるから。失敗したら。。。

「ん？カノンは食べないの？」

お姉ちゃんがおにぎりを口に運びながら言った。

「あ、そうだ。食べないと」とすぐ答え、慌ててラッピングを取った。コンビニのおにぎりは完璧すぎて怖い。栄養が傾いていることを無視すればフォームも、感触も、味もすべてうまい。

もぐもぐ。。。

――＝＝＋＝＝――

時間が流れ、僕が机にある機材などを使いなれたところ、勤務時間となった。

「おーい、新人ちゃん！カノンも」

「はい」

僕はお姉ちゃんに呼ばれ、すぐに席を立った。数秒後に涼風さんも同様に来た。
「二人とも３Ｄ　の経験は？」
「あ、絵以外はなにも分からないのですけど」
「一応使い方は把握しているよ」
「オーケ。では、青葉はこの参考書の第一章をやるように。カノンには早速仕事を振るよ。」
「「はい！」」
お姉ちゃんはすぐに資料を取り出し、僕に渡した。
「これ村のＮＰＣのデザインだから、モデリングして３Ｄ　キャラにして」
資料をじっくりみた。これは武器屋の店長さんのデザインだな。えーと、身長は１８０ｃｍで筋肉モリモリのお兄さん。ッチ　身長分けろ。
はいと答えた後僕はすぐ自分の椅子に座った。僕は基本キャラに合わせて音楽を耳に流しながら作業を進める。今回の筋肉君だったらヘビメタ、キュートで可愛いのだったらアイドル、などなどと。
ネイビーブルーのヘッドフォンを頭にはめた。ペンタブの上にペンを浮かせ、もう一度資料をチラ見し、ペンを踊らせた。まるでペンが人間のようにペンタブの上を漂った。

順調にキャラができていた。一つ一つの細かいところを大切にしながら、エラーなどの基本的なことを見る。
エラーなし。キャラもよし。これならいけるかな？

ペンを放し、背もたれにもたれ一息ついた。力が背もたれに逃げるような感覚が背中を刺激し、ヘッドフォンを首にかけた。
そういえば、涼風さんは大丈夫かな？
そう思った瞬間、、
ピロン
受信音が鳴ると同時にスクリーンの端からウィンドウが開いた
Ｆｒｏｍ　きらきら青葉
こっちは順調だよ！
絶対追い抜いてやりますよ！　（？・、？・、）??

。。。。なにこれ？なんか、、きたのだが、、社内メッセ？こんなのアリなん？会社で。

Ｔｏ　きらきら青葉

そんなの打っていいんですか？

怒られると思いますが、、、

一応返信したが、嫌な予感しかしない。

「影響されんの、早っ！」

お姉ちゃんがこっちを見た。

「カノンって、青葉からメッセきてる？」

「う、うん」

「ちょっと見せてくれない？」

「いいけど、、」

涼風さん。ごめんなさい。予感が命中したわ。

お姉ちゃんは僕を抱きしめ、頭を肩に乗せた。吐息が耳元に響き、体に鳥肌が広がるが、それを耐える。

数秒間後、お姉ちゃんの頭が上がった。すぐ「ありがとう」と感謝し、自分の机に戻った。

Ａ　ｆｅｗ　ｍｏｍｅｎｔｓ　ｌａｔｅｒ…（数秒後、、）

「す、すみませんでしたっ！」

ほら、言ったじゃん。

――＝＝＋＝＝――

一日の前半戦が終わろうとしていた。お昼の時間。それは、一時的の終戦を示すもの。その時間まであとわずかだった。

早く１２時にならないかなー、と思いながら画面に映っていた幼女を描いた。金色の髪に青い目。よくアルバムで見たお姉ちゃんの姿を思い出しながらペンをすらすらと動かした。そういえば、あのころは生まれてないんだよなー。

そんなバカみたいなことを考えていたら、また社内メッセが届いた。

Ｆｒｏｍ　八神コウ

お昼になったけど、一緒に食べる？

お姉ちゃんからのお昼のお誘いか。まあ断る理由もないし、いっか。

いいよ。遠山さんもさそう？と打ち、送信を押そうとした瞬間、またお姉ちゃんから

Ｆｒｏｍ　八神コウ

そういえば、青葉も誘おうか？

って、何でわざわざ社内メッセ？と思いながら、僕は体をまわし、お姉ちゃんを向いた。まだ仕事してるし。

「そんな仕事して、どうやって誘うの？」
お姉ちゃんは僕の言葉に反応したのか、一瞬フリーズし、すぐ隣のブースに消えた。
あおばー、とお姉ちゃんの声が響き渡った。そんな姿を見てると、隣の遠山さんが声をかけた。
「ずいぶん仲良しだね」
「まあ、一応姉弟ですから」
「ふーん。ねえ、ちょっと聞いていい？」
「え、いいですけど。」
「どうしたら、カノンくんみたいにコウちゃんと近い関係になれるの？」
僕は戸惑った。こういう質問って結構苦手だ。僕は基本、感覚で人と触れ合っているから、どうやったらと言われても。しかも、遠山さんなんか目が怖い。
「まあ、えっと、その」
「二人とも何してるん？」
「ひゃあ！」
まだまだ、一日は終わらない。

第四話

お昼ごはんを食べ終え、仕事に戻った僕は椅子に座りヘッドフォンをかぶった。うーんと声を出して画面とにらめっこした。

ここの影もう少し濃くした方がいいかな？でも、そうすると全部統一しないといけないから、サーバー重くなるかな？

そんなことを考えると、後ろから誰かの手が肩に置かれた。

「ひゃあ！」

「仕事中ゴメンね。社員証の写真撮るの忘れて、今から撮るから来てくれない？」

しまった。変な声が出てしまった。絶対変だと思われたよ。

それはともかく。

「社員証、今日撮るんですか？」

「え？今日撮らなくていつ撮るん？」

僕はてっきり明日から正式に社員になるのかと。

そういいながら、ペンを机に置き、モニターを消した。僕は自分の絵が他の人に直接見られるのが恥ずかしい。特に、知っている人だと余計に恥ずかしい。だから念のため

にモニターを消した。

これでデスクを見られても恥ずかしくないと確信した僕は、わかったと返事をした。

――＝＝＝＋＝＝――

「ほら、そこの壁際に立って」

はい、と少し緊張した青葉をお姉ちゃんがカメラを構えながら見た。しかし、中々ボタンを押さないお姉ちゃんがんー、と声を出して悩んだ。

「ねえ、一応服装は自由なんだけどさ、何で学生服なの？」

「いやだなー！学生服じゃなくて、スーツですよ。社会人の基本じゃないですか。」

手招きをした青葉が答えた。

改めて青葉の服装を見た。濃い青のブレザーに襟が丸い白いカッターシャツ。その襟に淡いピンク色のリボンが結ばれていた。そんな服装の青葉は、やはりネットで言うＪＫ（？）にみえた。でもＪＫってＪｕｓｔ　Ｋｉｄｄｉｎｇ　のＪＫでもあるから、メッセするの大変そうだなー。

「じゃあ、せめてスーツの正しい着方を覚えようぜ」

あわわわわ！おｎｎｎｎ姉ちゃんが急接近して、先ほど言ってたピンクのリボンをはずし、カッターシャツのボタンを一個はずした。ちょっと、見てるこっちが恥ずかしくなってきた。顔が、、、

お姉ちゃんに整えられた、青葉のスーツ姿を見た。
うっわ、童顔だからスーツ似合わない」
「まいーや」
「青葉さん。笑ってー（棒）」
「今聞こえましたよ！心の声！」
（この後、いっぱい写真撮ったのであった）
――＝＝＋＝＝――
ささ、数枚撮った青葉のあとは僕の番だ！
「んじゃあ、カノンの番だよ」
「はーい！」
と返事し、壁際にたった。服装は、黒いシャツの上にボタンをかけてない赤チャックシャツ。下は薄い青のジーンズ。同居人におすすめされて、こんなファッションになっていた。
「おー」
「ん？お姉ちゃんどうかしたの？」
「いや、改めてみると、身長高くなったなって。身長いまどれぐらい？」
「１３９．９５ｃｍだよ、、、」

と、悔しい思いか震えた声で吐き出した。涼風さんの身長がうらやましいな。

――＝＝＋＝＝――

「じゃあ完成を待つべし！」

と親指をbにしてドアを出た。

「そっか。じゃあ、入れなくなったんだ。」

「え、何を？」

「いや、お手洗いに行くとき社員証が無くて外から入れなかったんだよ」

「災難ですね。」

「大変やったね。おやつでも食べてリラックスしよ」

とブースから、なんかの方言で話かけてきたお姉さんが誘ってきた。ブースに入るとあら不思議。目の前に完璧なティーセットがあった。なんて素敵なお姉さんなんだ！

「おお！すごいです！」とつい声に出てしまった。

ブースの角のもう一人の子が立った。そして、「これ」と言いながら、高級そうなクッキーセットを出した。

――＝＝＋＝＝――

皆と軽く自己紹介した後、話が振られた。

「そういや、カノン君って大学卒業したんですよね？どこの大学ですか？」

「「え〝え〟?!そうなん（なの）?!」」
まあ、普通こんなリアクションだよね。
「知ってるかな?○○×大学ってとこなんですけど。そこの美術コースと情報電子、つまりコード班のするあれ、を通っていました。日本語でなんと言うのか分からないけど、Ｂａｃｈｅｌｏｒ　Ｄｅｇｒｅｅはありますよ。勉強したりして、大変でしたよ。」
「へー、って!○○×大学!?超名門じゃん!」
「そや!○○×大学ってめちゃ有名やん!」
「そんなところを飛び級で入学し、卒業したの!?」
「!?、、、」
「いや、でも結構怒られたよ。やっぱり、難しいからしょっちゅうミスして、レポートも提出締め切りの５秒前に提出。色々あったよ。」
「「「へー」」」
――＝＝＋＝＝――
「今作ってるゲームっていつ発売なんですか?」
「たしか、半年後だよ。噂ではそろそろ恐ろしく忙しい時期に入るんだって」
「へー、そうなんですか～。」
僕は興味なさそうにいった。はじめさんの言い方だと、なんかいたずらっぽい感じ

だったし、大袈裟だｒ
「なるよ、、、」
「、、へ」
「家に、、、帰れなく、、、なるよ」
首を横に向けると、ひふみ先輩が絶望を思い出すような顔をしてみてた。ｋ、怖い。。。
そんな中、涼風さんが実に興味深い質問をした。
「でも、八神さんは会社で寝てますよね。やっぱり、リーダーだから？」
「あの人は会社に住んでいると言ったほうが正しいと思うよ。しかも、数人分の仕事こなしてるし」
はじめの言葉を聞いて一安心した。ちゃんとやってるんだ。さすがお姉ちゃんって感心しちゃうな。
「ま、正確はあれだけどｗｗｗｗｗｗ」
「あ、お姉ちゃんお帰り」
「へ？」
――＝＝＋＝＝――
「おまたせ。はい、社員証。」
「ありがとう」

ピンクのネックストラップにぶら下がったカードが目に写された。おお、何かテンションあがる！

「なんか正式に入社した気分です！」

「いや、入社してますから。」

その後、涼風さんが社員証を忘れ、またオフィスに入れなかったことは一生忘れないだろう。

――＝＝＋＝＝――

休憩もお開きになり、仕事をして、時間は9時になった。一日の終わりがきた。

「お疲れ様ー」

「おつカツカレー」

「なにそれｗｗｗ」

涼しい夜風が髪を撫で、月の光が道を照らしていた。まあ、どちらかというと他の電気が照らしていたが、それは別として、、、

「あれ、お姉ちゃん会社で住んでいるんじゃないん？」

「いや、住んでないから。さすがに、毎日泊まっていたら持たないよ。リンにも怒られるし、」

「お疲れ様」

改めて言って、抱きついてみた。体が温まっていて、安心感が体沁みこんだ。
「ちょ、こら！カ・ノ・ン！みんなの前だから、離して！」
顔をトマトみたいに赤く染めたお姉ちゃんの顔は、相変わらず可愛い。はーい、と言いながら離した。
「もーう／／／／」
「えへへ、ゴメン」
お姉ちゃんは視線を青葉に向けた。
「初日はどうだった？何か質問でもある？」
「は、はい！大事なことを聞き忘れのですが、」
え、何か忘れてるっけ？重要なこと？
「私たちのチームが作っている新しいゲーム。なんというタイトルなんですか？」
「あ、そういえば僕も聞いてません！」
「お、聞いてなかったの？」
「あ、そういえば」
「私たちも、言ってなかったっけ」
少しだけ、間があったが、その後の言葉は僕も、涼風さんも思っていなかっただろう。
「フェアリーズストーリの三作目だよ。」

――＝＝＝＋＝＝＝――

「Ｉ，ｍ　ｈｏｍｅ！（ただいまー）」

無事一日を終え、アパートに帰った僕。

「Ｈｅｙ　Ｋａｎｏｎ！　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｈｏｍｅ！（お、カノンお帰りー！）」

「Ｉ，ｍ　ｈｏｍｅ．　Ｈｅｙ　Ｃｈｒｉｓ，ｇｉｖｅ　ｍｅ　ａ　ｈｕｇ～！（ただいまー！クリス、ハグしてー！）」

「Ａｌｒｉｇｈｔ　ａｌｒｉｇｈｔ（はいはい。）」

今、僕をハグしてるのはクリス。大学の同級生で、僕と同じ情報電気のコースを受けていた。僕と同じゲーム関係の仕事をしているが、彼は超有名な会社に入っている。僕と正反対で、身長は１８０は絶対超えているが、正確な数字は分からない。

因みに、彼はゲイである。

「Ｓｏ，ｈｏｗ　ｗａｓ　ｗｏｒｋ？　Ｙｏｕ　ｍｅｔ　ｙｏｕｒ　ｓｉｓｔｅｒ，ｒｉｇｈｔ？（仕事、どうだった？姉に会ったんだろ？）」

「Ｂｒｏ，ｈｅａｒ　ｍｅ　ｏｕｔ！　Ｔｈｅｒｅ　ｗａｓ　ｔｈｉｓ　ｐｅｒｓｏｎ　ｔｈａｔ　ｊｏｉｎｅｄ　ｔｈｅ　ｃｏｍｐａｎｙ　ｔｈａｔ　ｓａｍｅ　ｔｉｍｅ　ａｓ　ｍｅ　ａｎｄ…（　聞いてよ！僕と同時に入社した人がいてさ…）」

明日も楽しみだ！

第五話

第五話

僕が始めてゲームという存在を知ったのは、２歳の時だった。いとこが外国の友達を家に泊めていた。あんまり覚えていないけど、確かアメリカの生徒で典型的な茶髪のような感じだった。そのとき、彼らはＣＯＤ　ＷＡＷのゾンビモードや、ラストファンタジーＸ　をやっていた。

「お、ナイスキル！」

「ヤベー！ヤベー！カバー頼む！」

「こいつ、雑魚キャラなのにデザイン良すぎだろ（笑）」

いとこと留学生は楽しそうで、何時間もぶっ飛ばしやっていて、僕はただそれを見る。親は仕事で帰るのが遅く、いとこは家でプロゲーマーをしていた。

「ん？あ、カノンちゃんもやりたいか？」
そんな何気ない冗談のような誘いが僕の人生を変えた。
「カノン、やる！」
――＝＝＋＝＝――
入社して、一週間がたった。会社にだいぶ慣れた僕は現在
〝ＫＡＮＯＮ，ＷＡＫＥ　ＵＰ　ＧＯＤ　ＤＡＭＭＩＴ！〟（カノン、起きろクソが！）
「ブッフォッ」
叩き起こされていた。
〝Ｎｎｎｎ…Ｗｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｉｔ？〟（ウーン…今何時？）
〝６：３０　ＡＭ　Ｂｒｏ．　Ｙｏｕ　ｇｏｔｔａ　ｇｅｔ　ｕｐ　ｍａｎ！Ｔｈｅ　ｓｕｎ　ｉｓ　ｓｈｉｎｉｎｇ　ａｎｄ　ｉｔ，ｓ　ａ　ｇｏｏｄ　ｄａｙ，ｍａｎ！〟（朝の６時３０分だぞ。起きないと！太陽が出ていて、いい日だぞ！）
〝Ｕｇｈ…Ｆｉｎｅ〟（んあー。　しょうがないなー）
僕は朝が猛烈に弱い。弱点って言えば弱点だ。人間は寝ているときが一番幸せだといわれている。そんな幸せの時間から叩き起こすのが、僕のルームメイトのクリス。クリスは朝が強く、夜は弱い。逆に僕は朝に弱く、夜に強い。

僕はゆっくり布団をでて、そのままダイニングに向かった。アパートの部屋はそんなに大きいわけではないが、二人で住むぐらいのスペースがある。ダイニングテーブルに座ったら、クリスがエプロンのままパン一枚と皿一枚と牛乳を持ってきた。

〝Here's your French toast and milk.〟

（はい、フレンチトーストに牛乳）

〝Thanks.〟（ありがとう）

クリスはすぐキッチンへ戻り、自分の分を持って僕の前へ座った。

〝So, you know what, re you gonna do at work today?〟（んで、今日仕事で何するの？）

〝I gotta finish some NPCs, and some other designs my sisters supposed to do. She's doing the models for the human boss characters, so she can't touch any of the other human mobs〟（NPC のモデルを数体と、本当お姉ちゃんが担当のNPCを完成する。お姉ちゃん、人型のボスキャラのデザインしてるから、他の人型モブに手を出せなくて、）

〝Welp, I gotta do some extreme coding today. I'm doing one of the mini-dungeons in the game, and I gotta make it so that the NPCs will attack the character and move all around simultaneously.〟（俺は今日超絶コーディングをしないと。俺、小さいダンジョンをしていて、NPCがキャラクターを一斉に攻撃しながら、動くようにしないといけないんだ。）

そんな話を数分話して、家を出た。

〝GLHF at work!〟（仕事、頑張って楽しんで！）

〝'kay!〟（了解！）

そこから歩いて10分、僕は「イーグルジャンプ」に着いた。

――＝＝＋＝＝――

「カノン君、おはよう！」

「涼風さん！おはよう！」

入ってすぐ挨拶してきたのは、涼風さんだった。自分より年上で身長高いのに、そこらへんの中学生と大差ない涼風さんは、紫色のツインテールを揺らしながら、歩いてきた。

「カノン君。カノン君って今、仕事何してる？」
「ＮＰＣのモデリングとデザインしてるけど、それが何か？」
「ううん、やっぱすごいなーって。年下なのにもうちゃんと仕事しているから」
「いや、そりゃ一応大学出てるからな、」
「まあ、そうだよね」
　涼風さんが少し頭を下げた。悔しいんだろう。自分より年下の方がちゃんと戦力になっていることが。僕だって、５歳の人が同じことをしてたら、〝自分何してるんだろう〟と思うよ。そんな涼風さんに、
「えい！」
「はわああ！」
　ぎゅーっと、ハグをしてみた。
「か、か、か、カノン君!?」
「涼風さんは僕じゃないなんだから、落ち込まなくていいよ。」
「へ？」
「僕は、すごいと思うよ。涼風さん、いつも熱心に参考書進めるし、しかも結構速いペースで。このままだと、今週か来週には仕事振られるよ。」
「カノン君…」

「だから、頑張って！」
「…うん！やっぱそうだよね！頑張らないと！」
僕はハグを緩めて、距離をとった。
「その意気だよ！ささ、早くコンピューターを立ち上げないと！」
「わ、わ、わ、わかったから、押さないで！」
今日も一日が始まる。